

新たな模索へ

日本惑星科学会創設の頃だったと記憶しているが、宇宙研の山本（哲生）氏と茶のみ話をしていた際、東京圏で太陽系起源のセミナーを企画しようという話が持上がったことがあった。惑星科学に関連した講演会はいくつもあり、また、宇宙研、極地研、天文台にも関連したシンポジウムがある。更にその上、新たな学会を創ろうという頃で、『いまさらどうして?』と思わぬ訳でもなかった。だが、学会講演会では気の済むまで議論を続けるわけには行かない。シンポジウムにしたってそうである。『どうしてだろう』とか、『おかしいな』と思ったら、即座に質問でき、また、納得できるまで議論を続けられる、そんな場が1つくらいあってもいいだろう、というのが私の思いであった。

とにかく秋から始めようということになり、第1回のセミナーを9月19日東工大で開催した。東大、宇宙研、東工大から40名近い参加者があり、20名前後の参加者を想定していたわれわれは急遽セミナー室を変更せねばならぬほどの盛況ぶりであった（本誌松田氏の記事によると、関西でも同様のセミナーがあるらしい）。同じ惑星科学とはいえ、色々な専門の研究室から寄り集まっているだけに、1研究室だけのセミナーとは違った議論ができる。時として思わぬ質問やコメントを聞き、ハッとしたこともあった。こんなわけで、私自身は久しぶりにセミナーを楽しむことができた。もう1つ印象的であったのは、若い院生達が思いの外いきいきとして発言していたことであった。

このところいろいろな大学に「惑星」を冠した講座や学科が生まれている。そして日本惑星科学会も誕生した。しかし所詮われわれの「惑星科学」がマイナーであることに変わりはない。1つの大学に惑星科学関連の研究室がいくつもある、といった状況が望めるわけではない。事実、私事で恐縮だが、私の研究室は、院生が10以上もいるもののスタッフは私1人という弱小なものである。いろいろな話を院生に聞かせることも、また、研究テーマを自由に選ばせることも、私1人ではままならない。他方、惑星科学を目指そうとする若者たちの欲求はさまざまである。当然のこととして、彼等は『こんな問題に取り組みたい』、『こんな勉強もしてみたい』と多様な思いを抱いている。この矛盾をどう克服すべきか、日頃から頭を痛めていた。

東京圏合同セミナーを通して、凶らずもその答が見えたような気がした。次代を担う若い大学院生たちの教育は、大学や研究所の縄張を超え、“地域ぐるみ”で行なうべきではなかろうか、というのがその答えである。無論、現在の大学院制度のもとではそんな枠組みはない。しかし、地域毎のうまいグルーピングが可能であり、われわれ惑星科学に携わる者がその気になりさえすればなんとかできよう。とにかく、われわれは、物理学や天文学、地球物理学のように歴史と伝統があり、放っておいても若者が集り、既存の枠内で自然と若者が育つ、といったメジャーな分野ではないのである。そのことを余程考えて工夫に工夫を懲らさねば、このところ流行語となった「惑星」も、ただ惑うことだけに終りかねない。新しい学会ができた今、今度は肉付けをめざし更なる模索を続けなければならない。因みに、第2回『太陽系の起源』東京圏合同セミナーは10月31日東大地感教室で開催される。

日本惑星科学会会長・中 沢 清